

# なぜ、学院史資料室から学院史編纂室となったか

学院史編纂室主任研究員（元経済学部教員） 井上 琢智

## 学院史資料室

(1978 室長：小林信雄、柚木学、畑道也、山本栄一)

関西学院の創立 90 周年直前の 1978 年、図書館第 3 書庫 4 階の貴重図書室に学院史資料室が設置された。その目的は「学院の公文書、記録、創立者および学院関係者の諸資料等を収集、整理、保管し運用すること」であった。

1984 年、旧日本人住宅（現・関西学院会館）（写真）に同事務室が移り、専用資料庫が隣地に完成した。新大学図書館の完成に伴い、1998 年 1 月、時計台 1 階に入居した。この間『関西学院史資料目録』8 分冊を刊行し、『資料室便り』(No.1, 1985 ~ No.10, 1999) を発行した。

続いて 1990 年 4 月から学院史資料室は百年史編纂事業委員会事務局を兼ね、その下部組織である関西学院百年史編集委員会は百年史執筆の調査・研究・討論の内容を掲載する『関西学院史紀要』（図録正誤表あり）を 1991 年 6 月に創刊し、第 5 号（1996）まで刊行した。1995 年の阪神・淡路大震災をはさみながらも 1998 年に『関西学院百年史』全 4 巻（資料編 2 巻・通史編 2 巻）を刊行した。

この『百年史』執筆期間中の 1997 年度に与えられた大学の海外研修制度を利用してメルボルンのモナッシュ大学に在籍していた井上は、その年の 8 月までメルボルンで原稿執筆に従事した。

## 学院史編纂室

法人時代（1999 初代室長：山本栄一）

大学時代（2014 初代室長：神田健次）

関西学院のもっとも象徴的な建物である時計台（2009 年に国の登録有形文化財に指定）への資料室移動を契機として、学院史編纂室の今後のあり方が議論された。その検討課題は次の二点であった。

第一は、学院史の資料を収集するだけでなく、次回の年史編纂（周年事業は 25 年毎とされた）の準備を続ける調査・研究を継続的に行うことをどのようにすれば担保できるかであり、第二に、学院史編纂室が時計台に位置することから、その担うべき役割をどうすべきかという課題であった。

この二点は、いずれも時計台に位置する学院史編纂室を過去と現在と将来を結ぶ『場』として変貌させることを示唆した。それを実現するために創立 125 周年記念事業の一つとして大学博物館が 2014 年に時計台内に設置され、そ

れまで院長のもとに置かれていた学院史編纂室は関西学院大学博物館の一部局となり、学院史の常設展示と特別展示とが博物館と学院史編纂室とのよき協力のもとに開催できるようになった。

学院史編纂室の役割の検討に際して課題となった学院所蔵美術品調査と情報の集中管理については、当時美術顧問であった永田雄次郎が「報告 関西学院所蔵の美術作品に関する調査報告」—日本画を中心として—（『紀要』第 8 号、2002）を報告した。しかし、絵画の所蔵場所の変更が学院史編纂室へ報告されないこともあり集中管理は今なお万全ではない。

また、1988 年度、教職員、卒業生の著作等を収集する「新月文庫」が学院史資料室に設置された。大学博物館設置後、博物館が「新月文庫」を管理することになっているものの、収集・受入・データ入力については、大学図書館が引き続き担っている。もっとも、博物館には収納・展示場所がないため、公開は凍結されたままである（2024 年 3 月末の登録図書は、9,335 冊である）。

山本栄一は、学院史編纂室への名称変更の意図を振り返り、こう記している。「将来の関西学院というものに方向付けを出来るような役割を果たしていくような活動としての歴史編纂や成果が出るよう……常に体制を整える」必要があり、その編纂の仕事は「急流を駆け上るといぐらいの力がないと出来ない」（『学院史編纂室 30 周年を迎えて—なぜ学院史編纂が必要なのか—』『紀要』第 15 号、2009。本号に詳細な「学院史編纂室 年譜」および『関学』学 開講テーマ リスト）が掲載されている。今なお、この山本の想いを追いかけている。

（いのうえ たくとし）



旧日本人住宅（『神学部アルバム』1930 年頃より）